



Osaka Mozart Ensemble
65. Konzert

Orchester
Konzertmeister

Osaka Mozart Ensemble
Masato Ohnishi

14:00 Uhr Samstag, 22. Juli 2017

Toyonaka Aqua Bunka Hall

《Programm》

Karl Friedrich Abel (1723-1787) / Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

カール・フリードリヒ・アーベル / ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Sinfonie Nr. 3 Es-Dur KV 18 (KV³ Anh. 109^I; KV⁶ Anh. A51) (1764)

(Sinfonie Es-Dur op. 7.6; KnaA 18 Übertragung von Wolfgang Amadeus Mozart und Leopold Mozart)

交響曲 第3番 変ホ長調 KV 18 (KV³ Anh. 109^I; KV⁶ Anh. A51)

I . Molto allegro

II . Andante

III . Presto

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Divertimento Nr. 1 Es-Dur <Zweite Fassung> KV 113 (1773)

ディヴェルティメント 第1番 変ホ長調 <第2版> KV 113

I . Allegro

II . Andante

III . MENUETTO mit Trio

IV . Allegro

…… 休憩 Pause ……

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Konzert für Klarinette und Orchester A-Dur KV 622 (1791)

クラリネットと管弦楽のための協奏曲 イ長調 KV 622

I . Allegro

II . Adagio

III . RONDO: Allegro

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Sinfonie Nr. 40 g-moll <Zweite Fassung, Variant> KV 550 (1788)

交響曲 第40番 ㄱ短調 <第2版, 異稿> KV 550

I . Molto Allegro

II . Andante

III . MENUETTO mit Trio: Allegretto

IV . Allegro assai

《Einführung》

竹内 久力（たけうち くり） Klarinette

兵庫県出身。東京藝術大学音楽学部器楽科卒業。

第6回ヤング・クラリネッティスト コンクール(ヤングアーティスト部門)第1位、第1回秋吉台音楽コンクール(クラリネット部門)第3位、第4回同コンクール(同部門)第3位、第26回宝塚ベガ音楽コンクール(木管楽器部門)入選、第18回松方ホール音楽賞(木管楽器部門)奨励賞。第9回日本クラリネットコンクール入選。第30回日本クラリネットフェスティバル(北海道)に於いてヤマハ代表ゲストプレイヤーとして出演、大学卒業時にヤマハ管楽器新人演奏会(第31回、クラリネット部門)に出演。

これまでに室内楽を三界秀実、市坪俊彦、小畑喜昭の各氏に、クラリネットを藤井一男、山本正治、十亀正司、伊藤圭の各氏に師事。

ヴェンツェル・フックス、チャールズ・ナイディック、ニコラ・バルディール、大島文子の各氏によるマスタークラスを受講。

現在はフリーランスのクラリネット奏者としてソロや室内楽・大編成合奏での演奏活動、そして後進・社会人への演奏指導や編曲活動も行っている。



大阪モーツァルトアンサンブル Osaka Mozart Ensemble

1984年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラOBを結集し、年間4～5回の演奏活動を行っている。指揮者を置かずに自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986年6月に行った特別演奏会では、ウィーン・フィルのアルフレート・プリンツ氏、アダルベルト・スコッチチ氏等と共演し、好評を博した。1986年から1990年にスベトラ・プロティッチ氏と4回共演。1988年5月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲をレコーディングした。1989年から1994年、関西モーツァルト協会例会に7回出演。1991年12月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後200年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルトテウム大ホール、ウィーン・ミノーレン教会で演奏会を行った。1996年から2000年にかけてモーツァルト劇場例会に5回出演。2004年、指揮者なしでのモーツァルトの交響曲全曲演奏を20年かけて完結した。



モーツァルトとクラリネットの出会い

大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

K. F. アーベル/W. A. モーツァルト

交響曲 第3番 変ホ長調 KV 18 (KV³ Anh. 109¹; KV⁶ Anh. A51)

カール・フリードリヒ・アーベルは、1723年12月22日、ドイツ・ケーテンに生まれた。彼の父、クリスティアン・フェルディナントは、チェロとヴィオラ・ダ・ガンバの名手で息子の良き教師でもあった。ケーテンの宮廷には、1717年から楽長を務めていたヨーハン・ゼバスティアン・バッハがいたが、1723年5月22日、彼は、ケーテンの南東約70kmにある、ライプツィヒ・聖トーマス教会の聖トーマス教会附属学校カントル兼市音楽監督（トーマス・カントル）に異動してしまった。しかし、K. F. アーベルは、ライプツィヒのトーマス学校の生徒としてJ. S. バッハの教育を受けることになり、1748年、バッハの推薦でヨーハン・アドルフ・ハッセが率いるドレスデン宮廷楽団のメンバーとなった。7年戦争（1756年～1763年）の混乱のためにザクセンを離れたアーベルは、イタリアで活動後、1759年3月、ロンドンに居を構えた。彼はすぐに、シャーロット王妃とヨーク公の寵愛を受けることになる。ロンドンデビューは1759年4月5日、ソーホーのディーン・ストリートにある大ホールで開いた自身の演奏会であった。ヴィオラ・ダ・ガンバとクラヴィアのための協奏曲、オーボエ協奏曲など全て彼自身の作品が演奏された。

1762年の秋、J. S. バッハの末子、ヨーハン・クリスティアン・バッハが王妃の教師としてロンドンに着任した。故郷を同じくする二人は、すぐに異国の地で打ち解け、1764年2月29日には、ジョイントコンサートを行っている。その後、二人が企画したバッハ＝アーベル・コンサートは、貴族社会で長年にわたって支持されることになる。1765年1月23日、テレサ・コーネリーズ夫人の協力を得て、第1回目の演奏会がソーホー・スクエアのカーライル・ハウスで行われた。バッハ＝アーベル・コンサートは、年に15回開かれ、1768年からはオーマックス・ホールで、1775年には、彼らの所有となったハノーヴァー・スクエア・ルームズにその場を移し、1782年、J. C. バッハが亡くなる前年まで続けられた。バッハの死後、アーベルは、急に郷愁の念にかられたのかドイツを訪れ、そこで演奏会を開いて各地で称賛を浴びた後、パリに立ち寄った。彼は、血管破裂を起こして長い間音楽活動ができなくなるほどワイン好きで、毎年夏には、お気に入りのワインを味わうためにある裕福な地主の招待を受けてパリに旅行する習慣になっていた。1785年、ロンドンに戻った彼は、1787年6月20日、63歳で没した。

アーベルは、数多くの交響曲、協奏曲、室内楽、特にヴィオラ・ダ・ガンバのための曲を作曲した。本日、演奏する変ホ長調の交響曲は、モーツァルトの自筆総譜が残されていたことから、長らくモーツァルトの交響曲第3番変ホ長調KV 18とされてきた曲であるが、原曲は、アーベルが作曲した交響曲変ホ長調作品7の6である。1764年4月23日、ロンドンに到着した8歳のモーツァルトは、バッハ＝アーベル・コンサートで、バッハとアーベルの音楽に深い感銘を受けることになる。1765年7月24日にロンドンを発つまでの15ヶ月間、モーツァルトはこの偉大な2人の作曲家から様々なことを学んだ。モーツァルトの最初の交響曲が作曲されたのは1764年の夏と考えられている。

父を死の入り口まで連れてきた危険な喉の病気を治すために、（1764年）8月5日、ロンドン郊外チェルシーの家を借りなければなりません。・・・父が重病で臥せていたので、私達は鍵盤楽器に触れることを許されませんでした。そのため弟は暇つぶしに、オーケストラの全ての楽器、特にトランペットとティンパニを含んだ、最初のシンフォニーを作曲することになったのです。私は弟の横に座ってそれを写譜していかなければなりません。弟が作曲し、私が写譜している間、弟は私にこう言いました。「ホルンが何か価値あることを出来るように僕に注意してね！」・・・それから2ヵ月後、父はすっかり良くなって私達はロンドンに戻りました。

これは、モーツァルトの姉マリア・アンナが1799年（当時48歳）に35年前の亡き弟を回想した記録（アルゲマイネ・ムジカ・リツシェ・ツァイトウング、ライプツィヒ、1800年1月22日号）である。「最初のシンフォニー」である交響曲第1番変ホ長調KV 16には、トランペットやティンパニは使われていない。姉の古い記憶のため、記録の正確さには多少問題があると思われるが、幼いモーツァルトの創作過程を窺い知る上で興味深い。

交響曲第3番変ホ長調KV 18 (KV³ Anh. 109^I; KV⁶ Anh. A51)が書かれた経緯は分かっていないが、アラン・タイソンが行った、五線紙の透かし模様の研究によると、この交響曲と「最初のシンフォニー」にはロンドンで購入した12段の同じ五線紙が使用されている。おそらく、交響曲の学習のために、モーツァルトが耳にしたアーベルの美しい交響曲をそっくりそのまま写譜したのであろう。ちなみに楽器の指定、拍子や調性の記号、アコラーデ（ { ） 、速度表示は父レーオポルトの手によることが、ヴォルフガング・プラートの筆跡鑑定で明らかになっている。楽器の指定は、上から順に、Violino 1, Violino 2°, 2 Clarinetti, 2 Corni, Viola, Fagotto et Bassoの合計6段が使用され、2本のクラリネット、2本のホルン、ファゴット及びバスはそれぞれ1段に記載されている。原曲であるアーベルの6つの交響曲作品7は、1766年、アムステルダムファンメルから出版された。交響曲の標題は、SIX SIMPHONIES a Deux Violons, Taille & Basse, Deux Hautois & Deux Corns de Chasse.となっており、クラリネットではなくオーボエが使われている。

ロンドンにはザルツブルクにはないクラリネットがあった。バツハやアーベルもオペラや交響曲でたびたび使用していた。モーツァルトの父レーオポルトも、1764年6月28日、ザルツブルクの家主ローレンツ・ハーゲナウアーに宛てた手紙の中で、ラニラの庭園でヴァルトホルン、クラリネット2本、ファゴットの四重奏が午後10時から11時あるいは12時まで演奏されていることを伝えている。これまで、モーツァルトが編曲した際に、彼独自の考えでオーボエからクラリネットに変更したと考えられてきた。しかし、最近では、1760年から1770年当時、ごく普通にオーボエの代わりにクラリネットで演奏していた可能性が指摘されている。おそらく、モーツァルトがこの交響曲を聞いた時はクラリネットで演奏されていたのであろう。

また、第一楽章の19小節目や第二楽章のフィナーレの25小節目に、ファゴットのソロが出てくるが、アムステルダムファンメルから出版された原曲は、Viol: Solo との記載があり、チェロの指定になっている。ファゴットのソロも、モーツァルトのアイデアかと思われるが、1767年頃にロンドンのロバート・ブレムナーから出版された楽譜にはFag: Soloと指定があり、この部分も、もともとアーベル自身がファゴットとクラリネットの管楽合奏を意図していたことが分かっている。では、この曲はアーベルの交響曲の完全な筆写譜なのかと言うと、そうではない。音符単位で見れば至る所に、モーツァルト独自の変更点があり、第二楽章には、ファゴットに独立した声部を与えている。

モーツァルト一家が1年と3か月間、ロンドンに滞在した際、コヴェント・ガーデン劇場では、後年、モーツァルトが編曲することになるヘンデルのオラトリオ『アレクサンダーの饗宴』や『メサイア』が演奏されていた。彼は、学習のためにヨーハン・クリスティアン・バツハの作品の編曲も手掛けた。1772年の春にザルツブルクで編曲されたクラヴィーア協奏曲二長調KV 107 (21b), I、ト長調KV 107 (21b), II、変ホ長調KV 107 (21b), IIIの原曲は、それぞれ、バツハのクラヴィーア・ソナタ作品5の2、作品5の3、作品5の4である。そのほか、1767年4月から7月にかけてザルツブルクで作曲されたクラヴィーア協奏曲第1番へ長調KV 37、第2番変ロ長調KV 39、第3番二長調KV 40、第4番ト長調KV 41も、ヘルマン・フリードリヒ・ラウパツハ、レオンツィ・ホーナウアー、ヨーハン・ショーベルト、ヨーハン・ゴットフリート・エツカルト、カール・フィリップ・エマヌエル・バツハなどのクラヴィーア・ソナタを編曲したものである。

W. A. モーツァルト

ディヴェルティメント 第1番 変ホ長調 «第2版» KV 113

1771年8月13日、15歳のモーツァルトは父親とともにザルツブルクを出発し、8月21日水曜日の午後7時過ぎにロンバルディア大公国の首府ミラノに到着した。女帝マリーア・テレジアから10月15日に執り行われる皇子フェルディナント大公とモデーナの大公女マリーア・リツィアルダ・ベアトリーチェ・デステの婚儀の祝典劇の作曲を依頼されたのであった。8月29日に台本を受け取ったモーツァルトはさっそく作曲に取りかかり、9月23日、二幕の祝典劇「アルバのアスカーニョ」KV 111を完成させた。5回のリハーサル

の後に、10月17日に初演される。その後、19日、21日、24日、27日、28日に、16日に初演されたハッセのオペラ「ルッジェーロ」と交互に上演された。大成功を収めた様子は、レーオポルト・モーツァルトがザルツブルクの妻に宛てた10月19日付の手紙に述べられている。

16日はオペラ、そして17日にはセレナータでしたが、このセレナータはびっくりするほど人気があったので、今日もまたくりかえし上演されなければならないのです。大公はまたまた筆写譜を二部お命じになりました。貴族その他の人たちが、みんな路上で私たちにたえず話しかけてきて、ヴォルフガングに祝詞を述べてくれます。要するにだ！ お気の毒だが、ヴォルフガングのセレナータがハッセのオペラをすっかり打ち負かしてしまったので、私はそれをどう説明してよいのかわからないほどです。

10月26日付の手紙にも、24日には大公殿下と大公妃殿下が拍手をしてアリアを二曲アンコールただけでなく、バルコニーからモーツァルトに「ブラヴィッシモ・マエストロ」と叫んだと記されている。御年72歳の老大家ハッセのオペラを打ち負かした、とは、父親の言であるが、当のモーツァルトは、11月2日付の父から妻へ宛てた手紙の追伸に「今日はハッセのオペラがあります。でもパパが外出しないので、ぼくはそれを聴きにいきません。幸いぼくはアリアをほとんど全部暗記しているので、家にいながら、頭のなかでそれらをすっかり聴いたり観たりすることができます。」と述べている。11月8日、モーツァルト父子はハッセとともにフィルミアーン伯爵邸に招かれ、お金とダイヤモンドをちりばめた時計を下賜された。レーオポルト・モーツァルトよりザルツブルクの妻に宛てた1771年11月24日または23日と記された手紙に、以下のようにある。

私たちはまだ当地にいて、たぶんまだ一週間はここにとどまっていることでしょう。なぜなら、大公は火曜日にやっとヴァレーゼからお戻りになり、それから私たちとお話しになるからです。…（中略）… 今日、ミスヴェチェクさんが私たちをたずねてきましたが、彼は昨日到着し、第一オペラを書いています。フォン・マイヤーさんとデ・キウゾーリさんもよろしくとっています。私たちはしょっちゅういっしょに集まっていますが、昨日は、フォン・マイヤーさんのお宅で長い間音楽をやりました。

11月22日または23日にフォン・マイヤー邸で行われた音楽会に、ディヴェルティメント第1番変ホ長調KV 113が演奏されたものと推定される。自筆譜に1771年11月にミラノで作曲されたと記されたこの曲は、2つのクラリネット、2つのホルン、2つのヴァイオリン、ヴィオラ、バスの編成で作曲され、レーオポルト・モーツァルトの手で、「8声のための協奏曲またはディヴェルティメント Concerto ò Sia Divertimento à 8」と書き込まれている。新モーツァルト全集では、この曲をディヴェルティメント第2番二長調KV 131（フルート、オーボエ、ファゴット、4つのホルン、2つのヴァイオリン、2つのヴィオラ、バスの編成）と同様、室内楽ではなく、管弦楽のためのカッサシオン、セレナーデ、ディヴェルティメントの巻に収めているが、管弦楽作品として協奏曲のように演奏することも、室内楽として各パート1本ずつで演奏するディヴェルティメントとしても演奏可能という位置づけで、レーオポルトは曲名を書き込んだのではないかと思われる。

アルベルト・ミハエル（・フォン）・マイヤーは、女帝マリーア・テレジアの皇子フェルディナント大公の王室主計官で、彼の父は、女帝に仕えていた皇室主計官、ヨーハン・アーダム・マイヤーである。6歳のモーツァルトが姉とともに、ウィーンのシェーンブルン宮殿で御前演奏をした際、褒美として姉弟に皇女と皇子用の衣服を下賜するために、モーツァルト一家が滞在していた宿を訪れたのは、ヨーハン・アーダム・マイヤーであった。このつながりをフル活用して、レーオポルトは息子がフェルディナント大公に取り立てられるよう、ぎりぎりまでミラノ滞在を延長し画策したのであった。12月早々には、フェルディナント大公と話し合いの場が設けられ、まだ望みがあることを妻に伝えているが、12月12日にウィーンのマリーア・テレジアからフェルディナント大公に宛てたフランス語の手紙が残っている。

あなたは、若いザルツブルク人を自分のために雇うのを求めていますね。私にはどうしてだかわかりませんが、あなたが作曲家とか無用の人間を必要としているとは信じられません。けれど、もしそれがあなたを喜ばせることになるのなら、私は邪魔をしたくはないのです。あなたは無用な人間を養わないように、そして決してあなたのもとで働くようなこつした人たちに肩書など与えてはなりません。乞食のように世の中を渡り歩いているような人たちは、奉公人たちに悪影響をおよぼすこととなります。彼はその上大家族です。

1771年12月15日、モーツァルト父子はザルツブルクに帰郷した。その翌日、モーツァルトのよき理解者であった大司教ジークムント・フォン・シュラッテンバッハがその74歳の生涯を閉じた。その後、父子は1772年10月24日に3度目のイタリア旅行を行う。目的は、ミラノから委嘱された謝肉祭のためのオペラ「ルーチョ・シッラ」KV 135の作曲と上演である。モーツァルト父子は、1773年3月13日にザルツブルクに戻ってきている。なぜなら、翌日は後任の大司教（ヒエローニムス・ヨーゼフ・フランツ・デ・パウラ・コロレード伯爵）が選出されてちょうど一周年になる大切な記念日だったからである。

1773年春になって、ディヴェルティメント第1番変ホ長調KV 113に管楽器パートが追加された。第2版の総譜は、10段の五線紙が2段組みで使われ、上から第1オーボエ、第2オーボエ、第1イングリッシュホルン、第2イングリッシュホルン、2本のファゴットのみが記されている。これ単独では演奏することができず、あくまで1771年11月に作曲したディヴェルティメント第1番変ホ長調KV 113への追加分である。クラリネット・パートがオーボエやイングリッシュホルンに引き継がれているとして、2本のクラリネット、2本のホルンに替えて演奏するのではないかとの説もあるが、ホルンを省略する理由はなく、またオーボエやイングリッシュホルンに継承されていないクラリネット・パートもあり、クラリネットも省略する理由は見当たらない。同じ頃、ディヴェルティメント第4番変ロ長調KV 186 (159b)とディヴェルティメント第3番変ホ長調KV 166 (159d)が作曲された。これらのディヴェルティメントの楽器編成は、2本のオーボエ、2本のクラリネット、2本のイングリッシュホルン、2本のホルン、2本のファゴットである。これらのディヴェルティメントにおけるオーボエ、クラリネット、イングリッシュホルンの扱い方をみても、クラリネット、ホルンをオーボエ、イングリッシュホルン、ファゴットに置き換えるのではなく、追加すると考えるほうが、合理的である。

イングリッシュホルンやクラリネットはザルツブルクにはなかったとされるため、ディヴェルティメント第1番変ホ長調KV 113への管楽器パートの追加は、他のディヴェルティメントと同じような機会、すなわち、ミラノでのフォン・マイヤー邸やフォン・フィルミアーン伯爵邸で演奏するために行われたものと考えられている。しかし、ディヴェルティメント第1番変ホ長調KV 113《第2版》およびディヴェルティメント第4番変ロ長調KV 186 (159b)の正確な作曲時期は不明であり、特にディヴェルティメント第3番変ホ長調KV 166 (159d)は、自筆譜に3月24日、ザルツブルクで作曲されたと書かれていることから、これらの曲が本当にミラノで作曲されたのか、ザルツブルクに戻ってから作曲されたのか、実ははっきりしていない。

モーツァルトは、これまでにイングリッシュホルンをオペラ「ラ・フィンタ・センブリーチェ」KV 51 (46a)や「アルバのアスカーニョ」KV 111の Aria に使用している。前者はコルノ・イングラーゼの楽器指定、ハ調で記譜され、後者は、ヘ調のセルペンテ（蛇）という楽器指定になっている。オペラ「ラ・フィンタ・センブリーチェ」KV 51 (46a)は、1768年にヴィーンで作曲されたが上演されず、翌年5月1日にザルツブルク宮廷で初演されている。オペラ「アルバのアスカーニョ」KV 111は前述したとおり、1771年10月17日にミラノで初演されている。ちなみに、ディヴェルティメントの楽器指定は、ミラノで書かれたセレナータに使われたセルペンテではなくコルノ・イングラーゼである。

前述したように、1773年3月14日は、コロレード大司教の就任一周年であった。レーオポルト・モーツァルトは、このお祝いのためにヨーゼフ・シュタルツァーとクリストフ・ヴィリバルト・グルックの作品を編曲して、ディヴェルティメント第5番八長調KV 187 (KV³ 159c; KV⁶ Anh.C17.12) に仕立てた。このディヴェルティメントは、2本のフルート、5本のトランペット、4個のティンパニという編成で、コロレード大司教のお祝いムードを高める華やかな（バレエ音楽の？）曲集である。モーツァルトもこの珍しい楽器編成でディヴェルティメント第6番八長調KV 188 (240b) を作曲している。同じ目的のために作曲されたのかもしれない。各地から大勢の人がお祝いのためにザルツブルクを訪れたことであろう。そこに、イングリッシュホルン奏者やクラリネット奏者もいたかもしれない。モーツァルトはこの機会に、ディヴェルティメント第1番変ホ長調KV 113にイングリッシュホルンとクラリネットを追加したり、オーボエ、クラリネット、イングリッシュホルン、ファゴット、ホルンからなる祝祭的なディヴェルティメントを作曲した、とは考えられないだろうか。

W. A. モーツァルト

クラリネットと管弦楽のための協奏曲 イ長調 KV 622

モーツァルトが晩年に作曲した白鳥の歌「クラリネット協奏曲」は、管楽器のために作曲された協奏曲の最高傑作の一つとして

広く親しまれている。モーツァルトの死後10年ほどたった、1801～2年のほぼ同時期にBreitkopf und Härtel（ライプツィヒ）、André（オッフェンバック）、Sieber（パリ）から「クラリネット協奏曲」のパート譜が出版された。さらに、1801年にはA.E.ミューラーにより「フルート協奏曲」に編曲された版（イ長調からト長調に変更されており、伴奏ではフルートの代わりにオーボエが使用されている）が、1802年には「ヴィオラ協奏曲」に編曲された版が出版されている。また、C.P.E.バッハの弟子であったC.F.G.シュベンケは、「クラリネット協奏曲」を「ピアノ五重奏曲」に編曲し、ハンブルクのJohan August Böhmから1805年頃に出版していることから、当時この曲が大変な人気だったことを窺い知ることができる。それ以来、アンドレなどから出版された楽譜がモーツァルトの「クラリネット協奏曲」として何の疑いもなく今日まで継承されてきたのである。ところが、George Dazeley（1948年）や、プラーハの音楽学者であるJiří KratochvílとMilan Kostohryz（1956年）は、今日我々が目にしている「クラリネット協奏曲」のソロパートには音楽的に不自然な箇所があることを指摘した。

エルンスト・ヘスが、歴史的発見をしたのは1967年のことだった。ライプツィヒの一般音楽新聞（Allgemeine musikalische Zeitung, Leipzig）の1802年3月号にBreitkopf und Härtel社が1801年に出版したモーツァルト作曲「クラリネット協奏曲」のパート譜の論評（著者は不明であるが、ロホルツと考えられている）が掲載されていたのだ。それには、「モーツァルトはこの協奏曲を低音のCまで演奏できるクラリネットのために作曲したが、現在ではそのような楽器はほとんど使用されなくなったので、通常のクラリネットでも演奏できるように、出版社が、クラリネット・パートの音の改変をしてくれたことに感謝しなければならない。改変によりこの協奏曲がより良くなるということではないにしても。」と記載されており、通常のクラリネットでも演奏することができるよう改変した箇所を引用している。さらに、「出版に際しては、オリジナルの音符と共に小音符で出版社が提案する変更音を付加していれば、なお良かったかもしれない。」と指摘している。事実、モーツァルトの自筆譜が失われてしまった今日では、モーツァルトが作曲したオリジナルの音符はわからなくなってしまったのである。当時シュタードラーのバスクラリネットと呼ばれたこの低音のCまで演奏できるクラリネットは、現代のラージボアでオクターヴ低いバスクラリネットと区別するために1956年に、Jiří Kratochvílによってバセットクラリネットと名づけられた。

「クラリネット協奏曲」の自筆譜は失われたが、調性が異なるものの全く同じ旋律の断章が残されている。この断章は、「G管バセットホルンのための協奏曲」KV 584b (621b), Fr1787vで、199小節からなる。バセットホルンは、1770年頃にオーストリア・パッサウのマイヤー・ホーファー兄弟により開発されたとされているクラリネットの仲間で、シャリュモー音域と呼ばれる低音域を担当する。中間部で折れ曲がった形をしており、真鍮製のベルが取り付けられている。この断章と1967年にエルンスト・ヘスが発見した前述の論評で引用されたパッセージ、シュベンケの五重奏曲などを参考にしながら、エルンスト・ヘス（1967年）やアラン・ハッカー（1971年）、フランツ・ギークリンク（1977年）、ヘンリク・ヴィーゼ（2003年）は、第一楽章第146小節～第148小節などに現れる不自然な跳躍を取り除いたバセットクラリネット用楽譜の復元を試みた。現在、広く使用されているアンドレ版は、通常のクラリネットで出せない低音域はオクターヴ上げられているため、不連続なアルペジオになっているが、「G管バセットホルン協奏曲」の断章から復元したバセットクラリネット用の楽譜は、不連続だったアルペジオや音階が低音から高音まで連続的につながり、クラリネットの魅力のひとつである低音の独特の響きがこの曲により一層の深みを与えることになった。

ヨーゼフ二世に代わりオーストリア皇帝に即位したレーオポルト二世は、1791年9月6日、プラーハでボヘミア王として戴冠式を行なった。その際の祝典オペラとして、モーツァルトは「皇帝ティートの慈悲」KV 621を作曲し、上演した。上演に際して、シュタードラーも同行し、オペラの第9曲セストのアリア「私は行く、でも、いとしいあなたよ」と第23曲ヴィットリアの Rond「花の美しいかすがいを編もうと」に現れるクラリネットとバセットホルンのオブリガートを独奏している。前者のクラリネットも低音のCまで出てくるバセットクラリネットである。モーツァルトは「皇帝ティートの慈悲」上演後、9月20日にウィーンに戻り、「魔笛」KV 620の完成を急いだ。「魔笛」は9月28日に完成し、9月30日に初演された。一方、シュタードラーは「皇帝ティートの慈悲」の上演が続いていたためプラーハにしばらく滞在していた。10月7日、モーツァルトはバーデンに湯治療養に出かけた妻のコンスタンツェに宛てた手紙の中で、シュタードラーのための協奏曲について言及している。

シュタードラーのための Rond 楽章を、ほぼオーケストレーションをし終えた。その間、シュタードラーから手紙をもらった。…（中略）…実に奇妙なことだが、僕のオペラがあんなにも熱い拍手で迎えられた初演の晩、その同じ晩に、プラーハでは「ティート」が異常な喝采を受けて最後の幕を下ろした。…（中略）…シュタードラー（おお、ボヘミアの奇蹟よ！ — と彼は書いてい

るが)は、平土間からも、オーケストラからもブラヴォーを浴びた。(注：シュタードラはシュタードラーのボヘミア訛り、ブラヴォーを浴びたのは「ティート」のバセットクラリネットとバセットホルンのオブリガートソロをシュタードラーが素晴らしい演奏をしたから)

モーツァルトは、9月28日付けで「オペラ、魔笛のために — 祭司たちの行進曲と序曲」と「自作全作品目録」に記入したあと、長い横線を引いて、日付欄は空白のまま、以下のように書き入れる。

クラリネットのための協奏曲。兄のシュタードラー氏のために。伴奏。ヴァイオリン 2、ヴィオラ、フルート 2、ファゴット 2、ホルン 2 とバス。

その次の段に11月15日付けで「フリーメーソン小カンタータ」が記入されたが、これが生涯最後の記入となった。プラーハに滞在中のアントーン・シュタードラーは、10月16日に国民劇場で催した慈善演奏会で「クラリネット協奏曲」を初演したことから、「クラリネット協奏曲」は、10月10日前後に完成し、楽譜はプラーハに送られたものと思われる。「皇帝ティートの慈悲」を作曲していた頃からモーツァルトは徐々に体調を崩しており、このオペラもレチタティーヴォ・セッコの作曲を助手のジュースマイヤーに手伝ってもらいながら、やっと初演前日に完成させたくらいである。「魔笛」の作曲を進めていた7月に急に入った「皇帝ティートの慈悲」の作曲依頼、そして同じ頃、「死者のためのミサ曲（レクイエム）」の委嘱もあったので、これらの作曲は同時並行で進められたと考えられている。これだけの仕事の中で「クラリネット協奏曲」はいつ着手されたのであろうか。「皇帝ティートの慈悲」の作曲は突貫工事で行なわれたため、それ以前に作曲を開始したとは考えにくく、また、ウィーンに戻ってから「魔笛」の初演までは相当忙しかったと思われる。9月28日に「祭司たちの行進」と「序曲」を作曲して「魔笛」は完成し、二日後の9月30日の初演に引き続き、10月1日に再演しているが、この二回の演奏会でモーツァルトは指揮をしている。また、妻への手紙から、少なくとも7日、8日、9日、11日、14日にも「魔笛」が上演され、モーツァルトは客席にいたことがわかっている。7日の公演は超満員で、日ごとに評価が高まっていること、8日の公演では、パパゲーノがグロッケンシュピーゲルでアリアを歌う際に、敷席から舞台そでに上がっていたはずをしたこと、9日にはコンスタンツェの母親を連れていくこと、13日には、サリエーリとカヴァリエーリ夫人を招待し、義母と長子カールを連れていったことが述べられている。10月15日にはバーデンヘカールを連れてコンスタンツェ、末子のフランツ・クサヴァーと義妹ゾフィーを迎えに行っている。不治の病に冒されながらもこの超過密スケジュールの中、「クラリネット協奏曲」は作曲された。10月8日、コンスタンツェ宛に書かれた手紙によると、

きょうは朝早くから打ち込んで書いていたので、1 時半までかかってしまった。… (中略) … 食事のあとすぐに、ぼくはまた家に戻り、オペラの時間まで書いた。

モーツァルトは、7日のオペラの時間までに「クラリネット協奏曲」の「 Rond 楽章を、ほぼオーケストレーションをし終えた。」と手紙で述べていることから、海老沢敏は打ち込んで書いたのは「レクイエム」としているが、「クラリネット協奏曲」の最後の仕上げをしていたのかもしれない。いずれにしても、早朝からオペラの時間までが創作活動に当てられたことがわかる。このように考えてみると、「クラリネット協奏曲」の作曲に当てられた時間は、モーツァルトが亡くなる2ヶ月前の10月2日から10日前後のわずか一週間だったということになる。もっとも、「皇帝ティートの慈悲」上演のためにプラーハを訪れ、シュタードラーと過ごした頃から作曲の着想はあったと思われるが、そこで問題になるのが、前述した199小節のみ残されているト長調の「バセットホルン協奏曲」の作曲時期である。

モーツァルトがウィーンに定住した1781年頃、弟ヨハン・ネーポムク・フランツ・シュタードラーとともに宮廷劇場管弦楽団や宮廷吹奏楽団に所属していたクラリネット、バセットホルンの名手、アントーン・パウル・シュタードラーと知り合った。アントーンはクラリネットのシャリュモー音域を得意とする第二クラリネット奏者であった。モーツァルトは、それ以来、好んでバセットホルンを使用するようになった。「フィガロの結婚（1789年に追加した Rond）」、「後宮からの誘拐」、「皇帝ティートの慈悲」、「魔笛」などオペラに、「フリーメーソンのための葬送音楽」のようなフリーメーソンのために、「グラン・パルティータ」の機会音楽や「6つのノットウルノ」などの家庭音楽にバセットホルンが使用されているが、1曲を除いてすべてF管の楽器が使用されている。「レクイエム」で使用されたのもF管である。唯一の例外は、2つのソプラノ、バスの三重唱を2つのA管クラリネット、G管バセットホルンが伴奏するノットウルノ「黙しながら嘆こう」ト長調KV 437で、1787年ごろにジャカン家のホームコンサート用に作曲された。ゴットフリート・フォン・ジャカンはモーツァル

トの親友で、ホームコンサートでしばしば、コンスタンツェがソプラノを、モーツァルトがテナーを、ジャカンがバスパートを歌って楽しんだ。「6つのノットルノ」で使用された調性はヘ長調が3曲、変ホ長調が2曲、ト長調が1曲となっている。バセットホルンが使用されている他の曲の調性も調べてみると、ヘ長調が15曲、変ロ長調が12曲、二短調が6曲、変ホ長調が4曲ほかとなっており、モーツァルトが好んで使用した二長調は「レクイエム」の中の「感謝の賛歌」1曲のみである。クラリネットやトランペット、ホルンは移調楽器と呼ばれ、曲の調性によって管の長さが異なる楽器で演奏するが、クラリネットの場合は、すべての調性の楽器が用意されていないため、モーツァルトは曲の調性にに応じてC管、B管、A管のクラリネットを使い分けている。移調楽器になじみのない方のために、曲の調性と移調楽器を使用したときに記譜される調性を以下にまとめてみた。フラット3つで記譜される変ホ長調の曲をB管クラリネットで演奏する際、パート譜上はヘ長調になりフラット1つであるが、A管クラリネットでは変ト長調になり、フラット6つとなる。G管バセットホルンでは変イ長調でフラット4つ、F管バセットクラリネットでは変ロ長調でフラット2つとなる。

調性	C管	B管	A管	G管	F管
八長調・イ短調	なし	＃2	♭3	♭1	＃1
ト長調・ホ短調	＃1	＃3	♭2	なし	＃2
二長調・ロ短調	＃2	＃4	♭1	＃1	＃3
イ長調・嬰ヘ短調	＃3	＃5	なし	＃2	＃4
ヘ長調・二短調	♭1	＃1	♭4	♭2	なし
変ロ長調・ト短調	♭2	なし	♭5	♭3	♭1
変ホ長調・ハ短調	♭3	♭1	♭6	♭4	♭2

ここで、お気づきのように、バセットホルンのために書かれた曲はそのほとんどが表下半分のフラット系の調性であることがわかる。その調性を反映してか、オペラでもゆったりしたロマンチックな場面でバセットホルンが使用されることが多い。モーツァルトは協奏曲を作曲するに当たり、華やかな響きがする、シャープ系の調性を選んだのは、容易に想像できる。そのため、これまであまり使うことがなかったG管のバセットホルンを使用することになったのであろう。

「バセットホルン協奏曲ト長調」断章の自筆譜は現在スイスのStadtbibliothek Winterthur に保管されている。12段の五線紙が使用され、上2段と下2段は空白で中8段に上から独奏G管バセットホルン、第一ヴァイオリン、第二ヴァイオリン、ヴィオラ、第一フルート、第二フルート、第一及び第二G管ホルン、バスの順に記譜されている（ファゴットは含まれていない）。独奏声部は199小節まで完全な形で記入されているが、伴奏声部は、第一ヴァイオリンとバスがアウトラインを示しているのみで、ところどころ第二ヴァイオリンとヴィオラの重要な動きが記入されているにとどまっている。非常に奇妙なことに、180小節から伴奏声部は突然一音上に記譜されイ長調に転調しているのである。移調楽器であるバセットホルンに変化は認められない。180小節以降は、それまでと異なり、少しとがったペンを使って濃いインクで書かれている。そして200小節以降は失われている。

アラン・タイソンの使用五線紙（すかし模様）の研究によると、この「バセットホルン協奏曲」は「クラリネット協奏曲」の1年から2年前、早くて4年前の1787年に作曲したと結論付けている。五線紙は、約46cm×約64cmの大きな紙（Bogen）を半分に切って約23cm×約64cmにし、それを半分に折って1頁が約23cm×約32cmの4頁からなるフォリオ(Doppelblätter)が作られる。12葉24頁からなるこの断章は、タイソンの分類によるすかし模様#55（3枚のフォリオ、1葉から6葉、1頁から12頁、1小節から105小節）とすかし模様#82（3枚のフォリオ、7葉から12葉、13頁から24頁、106小節から199小節）の二種類の五線紙が使用されている。前者の五線紙は、1780年～1781年にザルツブルクあるいはミュンヘンで製作されたもので、モーツァルトはこの五線紙を前述したノットルノ「黙しながら嘆こう」ト長調KV 437（1787年?）、「クラリネット、バセットホルン、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための五重奏曲」断章KV 580b（1787年）「ホルン協奏曲第3番」KV 447（1787年?）、「音楽の冗談」KV522（1785年～1787年）、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」KV525（1787年）、「ドン・ジョバンニ」KV 527（1787年）、「戴冠式協奏曲」KV 537（1788年）などに使用している。後者の五線紙は、1785年ヴィーンで製作されたもので、「フィガロの結婚」KV 492（1786年）、「ピアノトリオ」KV 496（1786年）、「プラーハ交響曲」KV 504（1786年）、「6つのドイツ舞曲」KV 509（1787年）、「戴冠式協奏曲」KV 537（1788年）などに使用されている。モーツァルトは比較

的少量ずつ五線紙を購入し、使い切ってから新しい五線紙を購入していたと考えられ、五線紙の種類に基づく楽譜の年代推定については、信憑性が高いとされている。以上のことから、G管バセットホルンが伴奏するノットゥルノが書かれた1787年頃にノットゥルノに使用した同じ五線紙を使用して「バセットホルン協奏曲ト長調」の作曲は開始された。ところが、199小節を書いたところで、何らかの理由で途中放棄されることになった。その後、「皇帝ティートの慈悲」公演の際、シュタードラーに「あの曲どうなったんや！」と言われて、4年前に書き始めて放置していた曲を「クラリネット協奏曲」に仕上げ直したというわけである。このように作曲を一度中断して再開することはよくあることだったのだろうか。アラン・タイソンは、モーツァルトの自筆譜研究の中でそういった例をいくつか挙げている。例えば、1786年3月2日付けで「自作全作品目録」に記入されているピアノ協奏曲第23番イ長調KV 488である。第一楽章の最初の8枚のフォリオで使用されている五線紙は1784年3月から1785年2月頃のもので、クラリネットが記譜されている5段目と6段目は、三つのシャープが削除されているにもかかわらず、9-18小節と62-66小節は実音で記譜されている。また、その部分は四角く縁取られた上に×印が付いており、第一楽章の後の空白頁にA管クラリネット用に移調して再録されている。これは、当初、クラリネットではなく、オーボエの伴奏で作曲が始められたが、1、2年放置した後、オーボエ・パートを変ホ長調協奏曲KV 482（1785年12月16日）、八短調協奏曲KV 491（1786年3月24日）で使用したクラリネットへと変更して作曲を再開したことを示すものである。このように、作品が1年、2年と「断章」として放置されることはありえるのである。

ところが、使用五線紙の研究を進めていくと、すかし模様#55の五線紙については、5つのコントラダンスKV 609（1791年）にも使用されており、すかし模様#82の五線紙は、「魔笛」KV 620の56葉から59葉（1791年）、未完に終わった「ホルン協奏曲第1番」KV 412+514（386b）（1791年）にも使用されていることがわかり、1787年より前には作曲されなかったということしか、はっきりしたことは言えなくなってしまった。もっとも「コントラダンス」は3枚の単葉（Einzelblätter、フォリオではなく、一枚の紙に2頁のみ）であり、昔作曲した楽譜から抜き取っても構わないところからとってきたのかもしれない（3枚とも同じすかし模様#82の五線紙であるが）し、「ホルン協奏曲」も第1楽章の1葉から4葉で一枚のボーゲンが使われているので、この曲も1787年頃に作曲開始された、と解釈できなくもない。しかし、「魔笛」については1787年頃に作曲開始されたとは考えにくい。そのため、アラン・タイソンも、「バセットホルン協奏曲」が1791年に作曲が始められたという可能性も否定していない。

先にこの「バセットホルン協奏曲」の200小節以降は失われたと述べた。確かに失われたのは事実であるが、次のような仮説は成り立たないであろうか。「皇帝ティートの慈悲」の上演のためにプラーハに同行したシュタードラーとG管バセットホルンのための協奏曲を作曲することで合意したが、179小節まで作曲した時点で何らかの理由、例えば演奏困難な箇所がある、音色にムラがある、音程が悪い、出せない音がある（シュタードラーのF管バセットホルンにはCisが出せるようキーが取り付けられていた（KV 436、KV 438に現れる）が、G管のバセットホルンにはそれがなく第一楽章の92小節に現れるCisを出せなかった可能性が考えられる）……などの理由があって、同じシャープ系の調性であるイ長調でA管のバセットクラリネットのための協奏曲を作曲することに方針変更することになった。作曲に当たっては、まず、モーツァルトは独奏声部と第一ヴァイオリンとバスのアウトラインを、他の楽器はどこどころ重要な動きのみを記入していき、第一楽章を完成させた。その後、細かいオーケストレーションを書き入れていったが、ト長調とイ長調が混在している最初の部分にあたる6枚のフォリオは利用できないため、最初の部分はイ長調に書き直した。完成後、自筆譜はシュタードラーの手に渡ったが、その後、行方不明になったため、皮肉にも不要になった最初の6枚のフォリオのみが現存することになった。

W. A. モーツァルト

交響曲 第40番 ト短調 <<第2版, 決定稿>> KV 550

最愛の同士よ！

あなたの真の友情と兄弟愛にすがって、厚かましくもあなたの絶大の御好意をお願いします。——あなたには、まだ8ドゥカーテン借りています。——いまのところ、それをお返しすることができない状態にあるのに加えて、さらに、あなたを深く信頼するあまり、ほんの来週まで（そのときにはカジノで私の演奏会が始まるので）、100フロリンを融通して助けてくださるよう、あえてお願い

する次第です。

モーツァルトがフリーメーソンの盟友であったミハエル・プフベルクに宛てたこの手紙の日付は確定されていないが、1788年6月と推定されている。彼に宛てた切実な借金依頼の手紙は20通にのぼり、その依頼合計は4000グルデンに達した。モーツァルトの希望は全てが叶えられることはなく、実際には計1415グルデン、約360万円の借金をすることになる。数日後には、また1年か2年、1000もしくは2000グルデンを然るべき利子で貸してくれるよう、せめて明朝までに2-300グルデンだけでも貸してくれるよう懇願している。その手紙の追伸には、

追伸 お宅での小音楽会を
いつかまた開きませんか？——
新しい三重奏曲を書きましたよ！——

と、ある。この三重奏曲はプフベルクに書かれたといわれている、ピアノ三重奏曲木長調 KV 542（自作全作品目録には6月22日の日付で記載）である。またその数日後の6月27日にも、プフベルク宛てに窮状を訴える手紙を書く。

正直に申し上げて、お借りしたものをすぐにお返しすることがどうしてもできないので、御寛大な猶予をお願いせざるをえないからです！・・・（中略）・・・私の現状は、どうしても借金せずにはいられないほど困窮しています。

この手紙の中で、モーツァルトはこの10日間に2か月分の仕事をしたと述べている。実際、彼の自作全作品目録には、

- 6月22日、ピアノ三重奏曲木長調 KV 542
- 6月26日、交響曲第39番変木長調 KV 543
- 6月26日、行進曲二長調 KV 544
- 6月26日、ピアノソナタ八長調 KV 545
- 6月26日、アダージョとフーガ八短調 KV 546

との記載があり、この時期に精力的に作曲が進められたことが裏付けられる。作曲のスピードは落ちることなく以下のように続く。

- 7月10日、ヴァイオリンソナタへ長調 KV 547
- 7月14日、ピアノ三重奏曲八長調 KV 548
- 7月16日、三重唱曲 KV 549
- 7月25日、交響曲第40番ト短調 KV 550
- 8月10日、交響曲第41番八長調 KV 551

どうしてモーツァルトはこれほどまで借金せずにはいられないほど困窮していたのであろうか。多額の借金は体が弱かったコンスタンツェの療養費に充てられたと考えられているが、モーツァルトが1788年8月2日、ザンクト・ギルゲンに住む姉に宛てた手紙によると、

ぼくの宮廷務めの件についてお答えすれば、皇帝はぼくを御自身皇室にお抱えになられた、つまり正式に法令で布告されたのです。でも、差しあたってたったの800フローリンです。——とはいえ、だれも皇室でこれだけ多くもらっている人はいません。

と、伝えている。とてもプフベルクに宛てた手紙と同じ時期の手紙とは思えない。また、ヨアヒム・ダニエル・プライスラーの『フランス、ドイツ旅行記』によると、

1788年8月24日、日曜日・・・午後ユンガー、ランゲ、ヴェルナーが楽長モーツァルトを訪ねるために我々を迎えに来た。・・・
(中略)・・・彼の妻が楽譜書きのための驚ベンを削った。弟子が作曲した。4才の子供が庭の中を走り回り、レツィタティーフを歌った。

確かに、ウィーン市内から家賃の安い郊外に引越しを余儀なくされていたが、とても貧困で惨めな生活をしているようには思えない。確かに、モーツァルトは、宮廷から支給される800グルデンの年棒の他に、作曲料や、演奏料、レッスン料や出版で得た収入を合わせると、当時のウィーン総合病院の院長(年棒3000グルデン)まではいかないと、外科医長(同1200グルデン)をはるかに超える高給を取っていたことがわかっている。(1グルデン=1フローリン銀貨、1ドゥカーテン金貨=4.5フローリン銀貨、1フローリン銀貨=60クロイツァー銅貨)

モーツァルトの最後の三大交響曲、第39番変ホ長調KV 543、第40番ト短調KV 550、第41番ハ長調KV 551は貧困のどん底から誕生し、モーツァルトの存命中には一度も演奏されなかったと、まことしやかに語り継がれてきた。確かに、確実に演奏されたことを示す記録は残っていないものの、現在では完全に否定されている。当初フルート1、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2および弦楽器の編成で作曲された交響曲第40番ト短調KV 550は、第二楽章の29小節目からの4小節と100小節目からの4小節で、管楽器に現れる下降音形の旋律を弦楽器に移す異稿が残されている。ロピンス・ランドンは、感情のきめこまやかなこの部分にわざわざモーツァルトが修正を施したのは、音色の理由よりも、実際的な理由、すなわち、当時のウィーンの木管楽器奏者にとっては演奏が難しかったからではないかと推定している。また、クラリネットを追加してオーボエ・パートを変更した修正版(第2版)も作曲している。これらの修正は実際に演奏が行なわれたことを証明するものである。さらに、一連の交響曲は、モーツァルトの死後早くも2年後の1793年にはハ長調KV 551が、1794年にはト短調KV 550が、1797年には変ホ長調KV 543がヨハン・アンドレから出版されている。これは当時これらの交響曲が広く知られていたことを示すものである。1789年5月12日、ライプツィヒで催された演奏会では、第一部の最初と最後に、第二部の最後にモーツァルトが作曲した交響曲が演奏されている。また、1790年10月15日に行なわれたフランクフルトでの演奏会では、最初に「モーツァルト氏の新しい大交響曲」が演奏されている。この演奏を聞いたルートヴィヒ・フォン・ベントハイム＝シュタインフルト伯爵は、この「モーツァルト氏の新しい大交響曲」はずっと以前に聞いたことのある美しい交響曲であった、と旅行記に記している。この演奏会で演奏されなかった最後の交響曲を含めて、これらの演奏会で用意された交響曲は三大交響曲のいずれかであったのではないかと考えられている。また、1991年4月16日と17日にブルク劇場で行なわれた演奏会でも最初にモーツァルトの交響曲がアントーニョ・サリエリの指揮で演奏されているが、この演奏会では、クラリネット奏者のアントーンおよびヨハン・シュタードラー兄弟が出演していたことから、交響曲第40番ト短調KV 550の第2版が演奏されたのではないかと考えられている。

さて、前述したとおり、第二楽章の異稿(29小節目からの4小節と100小節目からの4小節)が成立した理由として、ロピンス・ランドンは、オーボエで演奏するのが難しかったため、その音形を弦楽器に移したと説明していたが、どうしてこの部分の下降音形だけを弦楽器に移したのか、私はずっと疑問に思ってきた。そんな中、1997年、クリフ・アイゼンから新説が発表された。彼は、グラーツのシュタインマルク州立古文書館が所蔵する、モーツァルト自身の書き込みがある筆写パート譜を調べた。このパート譜は、モーツァルト自身が所有し実際に演奏に使用した楽譜と推測される。このパート譜の第二楽章に書かれた修正の跡から、異稿はオリジナル稿を推敲したものであり、モーツァルトの意図は、オリジナル稿を異稿に置き換えることであったことが判明した。もっとも、この考えは、1942年に自筆譜を研究したエールリヒ・ヴァレンティンにより指摘されていた。この筆写パート譜はラノワ・コレクションに含まれる資料である。19世紀前半に活躍した音楽家ハインリヒ・エドアルト・ヨーゼフ・フォン・ラノワ(1787-1853)は、チェルニー、ドニゼッティ、ベルリオーズ、メンデルスゾーン、リストといった著名な作曲家たちと親交があり、モーツァルトの息子、フランツ・クサヴァーとも親しい間柄であった。彼が所蔵していた膨大な楽譜類は、327人の作曲家による1256点の手稿譜及び印刷譜からなり、モーツァルトの楽譜資料は117点を数える。その中に、交響曲第40番ト短調KV 550の筆写パート譜のセットが含まれていた。このセットは全15パートからなり、第1版の楽譜だけでなく、第2版の2つのクラリネット・パートと2つのオーボエ・パートも含まれる。これらはモーツァルトのウィーン時代の主要コピストの一人である姓名不詳仮名の「Viennese Mozart-Copyist 1 (VMC-1)」氏に加え「Copyist a」氏および「Copyist b」氏の3名のコピストによる写譜の合本である。VMC-1による筆写譜は、第2版のオーボエ・パートとクラリネット・パート、第一ヴァイオリンと第二ヴァイオリン、バスの楽譜である。この資料はモーツァル

トの死後に作成された二次的な資料と評価され、新全集の校訂時には使用されなかった。

その後、アイゼンが 1990 年代になってこの資料的価値を見出した。VMC-1 による第二ヴァイオリンと第一オーボエ（第 2 版）のパート譜にモーツァルト自身による音符の修正とデューナミック記号の補足があったのである。ヴァイオリンとバスのパート譜にはもともと第二楽章の 2 箇所（29 小節目からの 4 小節と 100 小節目からの 4 小節）にはオリジナル稿のみが記載されていたが、VMC-1 がこれに斜線を引いたり、上から五線の紙片を貼るなどして削除し、新モーツァルト全集が「異稿」とした楽譜を書き込んでいる。Copyist a, b が作成したパート譜は、シューマン時代の楽譜と同様、2 箇所に異稿とオリジナル稿が両方とも続けて筆写されていたが、のちにオリジナル稿の 4 小節だけが斜線で消され、異稿のみが残された状態になっている。アイゼンの仮説によれば、モーツァルトが第二楽章の異稿を作ったのは、グラーツの筆写パート譜をコピストが作成している最中だった。異稿ではなく、決定稿だったのだ。モーツァルトの死後、写譜工房のトレークはコンスタンツェから筆写譜セットを入手したが、何らかの理由で散逸し、1793 年 12 月に筆写譜の販売広告をウイーン新聞に掲載したころに Copyist a, b から入手したものと合わせて販売した。Copyist a, b による写譜は音符の間違いが極めて多く、モーツァルトとは直接関係ない二次的な楽譜から写されたと考えられている。ここで一つ問題がある。VMC-1 の楽譜は、2 つのヴァイオリンとバスは第 1 版の異稿、クラリネット、オーボエは第 2 版の楽譜なので、両者を同時に演奏に使うことができない。もし同時に使うと、アンダンテの 2 箇所で 32 分音符の下降音形を弦と管がユニゾンで演奏することになる。いったい、どのように演奏されたのであろうか。

29 小節目からの 4 小節と 100 小節目からの 4 小節の異稿が成立した経緯をまとめてみよう。

- モーツァルトは第 1 版を作成した。管楽器の編成は、1 本のフルート、2 本のオーボエ、2 本のファゴットと 2 本のホルンである。ホルンは、交響曲第 25 番ト短調 KV 183 (173dB)と同様、当初、2 本の B 管ホルンと 2 本の G 管ホルンの計 4 本で構想された（2 つのパートを 1 段でまとめるときは、音部記号が 2 つ書かれるが、ホルンの各段にはト音記号が 2 つずつ書かれている）が、16 小節目から 19 小節目に 4 声を書き入れた後に削除している。160 小節目から 166 小節目にかけて、ホルンを前面に出して厚みをつけていたが、これも削除し、B 管ホルン 1 本と G 管ホルン 1 本に変更してしまった。27 小節目の後半からの 28 小節目と 98 小節目の後半から 100 小節目は、第 1 版ではフルートになっているが、オーボエの段に記載されている。したがって、当初オーボエで演奏することを意図していた。
 - 27 小節目からの 2 小節と 98 小節目からの 3 小節をオーボエからフルートに振り替えた。自筆譜には、これらのオーボエの段の上部に薄いインクでフルート、下部にクラリネットの書き込みがあることから、この修正と第 2 版の作成は、ほぼ同時期に行われたと思われる。第 2 版は、2 本のオーボエ、第一クラリネット、第二クラリネットの三段を一組にして第 1 版のオーボエ・パートを置き換えるように書かれている。第 1 版の総譜の精緻な筆跡と比べると、第 2 版の管楽パートは、急な要請により、かなり急いで書いたのではないかとの印象を受ける。
 - 別紙に異稿が作成されると同時に、29 小節目からの 4 小節と 100 小節目からの 4 小節を異稿と差し替えるべく、自筆譜の 29 小節目と 100 小節目に薄いインクで複縦線を書き入れた。モーツァルトと仕事をしていた VMC-1 がパート譜を筆写したときは、オリジナル稿を削除し異稿に置き換えた。このとき、第 2 版の楽譜には修正が施されていない。モーツァルトの死後、コンスタンツェから自筆譜を受け取ったオッフエンバックの出版社アンドレは、29 小節目からの 4 小節のところに「注意：ここに記されている 4 小節の楽節は、かつてモーツァルトがクラリネットを付け加えていなかった時点で書かれ、のちに削除された 4 小節分に相当する。A」と書き込んでいる。また、別紙の方には、「このページと次のページは、クラリネットとオーボエに関する加筆がおこなわれた際に失われた。A」と書き込んでいる。もちろん、アンドレの憶測が入った注意書きである。A は、アンドレのイニシャルである。
 - モーツァルトは、複縦線に「注意：別紙を見よ」としか書かなかつたので、別紙に書かれた 4 小節をどのように扱うのかわからず、18 世紀末から 19 世紀前半に作成された筆写譜や印刷譜では、別紙を複縦線の場所に挿入してしまった。その結果、4 小節ずつ余分な音符が挿入されたフレーズになった。
 - ローベルト・シューマンは、音楽的に見てこれは明らかにおかしいと考え、それぞれ最初の 4 小節（すなわち異稿）を削除し、次の 4 小節（すなわちオリジナル稿）を残すのが妥当だと主張した。なぜなら、突然フォルテになる異稿より、クレッシェンドするオリジナル稿の方が自然に感じられたからである。
-

- ヨハネス・ブラームスは、ピアノ五重奏曲を献呈した返礼にヘッセン王女アンナからト短調交響曲の自筆譜を下賜され、所有していた。自筆譜にはモーツァルトが書き間違えた B 管ホルンの 257 小節目に「×NB」といったブラームスの書き込みが残っている。旧モーツァルト全集の編集者であったブラームスは、異稿を削除した版を採用した。
- 新モーツァルト全集もそれを踏襲し、2 箇所の本래の決定稿を異稿として巻末に収録してしまった。

これまで、第 1 版→第 1 版に異稿を含む修正稿→第 2 版の順で作曲がなされたと考えられてきた。しかし、VMC-1 による第 2 版のクラリネット、オーボエの楽譜は、第 1 版の修正稿ではなく第 1 版のオリジナル稿をもとに作られていることから、第 1 版のオリジナル稿→第 2 版→第 1 版の修正稿の順で作曲された可能性が考えられる。第 2 版は 1791 年 4 月 16 日、17 日にブルク劇場で演奏されたと考えられてきた。しかし、アラン・タイソンの使用五線紙の研究から、第 2 版は 1788 年 9 月までに最も頻繁に用いられてきたものが使用されていることから、第 1 版が完成した 1788 年 8 月 25 日からさほど遠くない時期であった可能性を裏付ける。第 1 版の修正稿がいつ作られたかはわからないが、VMC-1 による修正作業が示すことは、第 1 版のオリジナル稿に基づく弦楽パート譜を使った第 2 版での演奏後に、第 1 版の修正稿が作成された、ということであろう。その後、第 2 版がどのように演奏されたのか？の問いに対する答えはないが、第 2 版の修正稿の総譜やそれに基づくクラリネット、オーボエ・パート譜は散逸してしまったのかもしれない。あるいは、第 2 版が演奏されたのは、1788 年の極めて限定された時期のみだったのかもしれない。本日の演奏会では第 2 版で演奏するが、第 2 版の最終形はこうではなかったかという仮説のもとに、第二楽章の 29 小節目からの 4 小節と 100 小節目からの 4 小節は異稿で演奏してみることにした。異稿にみられる管楽器の掛留音は、第一楽章の弦楽器に現れる感傷的な掛留音と同じ効果を出すことであろう。短 2 度の下降進行は、マンハイム楽派が好んで使用したことから、マンハイムのため息と言われている。また、近い将来には、27 小節目からの 2 小節と 98 小節目からの 3 小節をオーボエに戻したオリジナル版でも演奏したい。

1778年11月14日、ウィーンの東80kmの所にあるプレスブルク、現在のスロヴァキアの首都、ブラステイラヴァに生まれたヨハン・ネーポムク・フンメルは、1786年頃から1788年12月までの約2年間、モーツァルト家に住み込みで教えを受けていた。その時期はちょうどモーツァルトが、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」KV 525、歌劇「ドン・ジョヴァンニ」KV 527、クラヴィア協奏曲第26番「戴冠式」KV 537、交響曲第39番 KV 543、交響曲第40番 KV 550、交響曲第41番「ジュピター」KV 551など数々の傑作を作曲した時期と重なる。1829年7月27日、ヴィンセント、メアリー・ノヴェロ夫妻が行ったピアノメーカー・シュタイン社を経営していたアンドレアス、ナネット・シュトライヒャー夫妻へのインタビューにフンメルとモーツァルトの親密な師弟関係が出てくる。ナネット・シュトライヒャー夫人はモーツァルトの父レーオポルトの故郷アウグスブルクのピアノ・オルガン製作者シュタインの娘でモーツァルトやベートーヴェンの弟子であった。アンドレアス・シュトライヒャーはクラヴィアの教師でモーツァルトの四男フランツ・クサヴァーに最初にクラヴィアを教えた人である。

フンメルは 5 年間モーツァルトの家に住み込みで勉強しました。よくモーツァルトが家に帰って来て、何か一緒に弾こうと思った時、眠っているフンメルを叩き起こして弾かせることになったそうです。少年が眠い目をこすって気乗りしない様子だと、先生は水を一杯飲ませて、「さあ、いい子だからね」となだめ、それから二人で弾くのでした。

5年間住み込んだというのはシュトライヒャーの思い違いである。10歳になったフンメルは1788年末から4年間に渡り、父ヨハネスと共に、モーツァルト親子がかつてそうであったように、ヨーロッパ各地を旅し演奏会を行った。プラハ、ドレーズデンを経てベルリンに滞在、その後、ハノーヴァー、コペンハーゲンに行き、1790年の春には、ハンブルクからエディンバラに渡っている。その後ダラム、ケンブリッジを経て秋に到着したロンドンに2年間滞在した。1789年5月21日付のベルリンのシュペーナー新聞には次の広告が出ている。

5月23日、日曜日の夕、コルシカ楽堂においてコンサートが行われるが、満員の盛況となろう。ウィーンからの10歳の名手フンメル氏がフォルテピアノで演奏する。彼は著名なモーツァルト氏の弟子で、熟練さ、確実さ、それに繊細さにおいて、あらゆる期待を凌駕している。

モーツァルトは、彼が編曲したヘンデルの『メサイア』をヨハン・フォン・エステルハーゼ伯爵邸で指揮をした翌日、1789年4月8日にカール・リヒノフスキー公爵とともにヴィーンを発ち、プラハを経由して4月12日、ドレーズデンに到着した。4月14日午後5時半からに宮廷で選帝侯フリードリヒ・アウグスト三世の妃アマーリエのために御前演奏会を行い、「戴冠式協奏曲 KV 537」を演奏した。その後、ライプツィヒを経由して5月19日にベルリンに到着している。おそらくこの最愛の弟子と再会していたことであろう。先に述べたシュトライヒャーの回想からもモーツァルトはフンメルに特別な思いで接していたであろうことは容易に想像がつく。フンメルもモーツァルトの後期交響曲やクラヴィア協奏曲を室内楽に編曲したり、伝記を編纂するなど、終生師匠を敬愛していた。

フンメルが、モーツァルトの交響曲第40番短調 KV 550 をフルート、ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための四重奏曲に編曲した楽譜にはメトロノーム記号が記載されている。それによると、第一楽章（モルト・アレグロ）は二分音符 = 108、第二楽章（アンダンテ）は八分音符 = 116、第三楽章（メヌエット）は付点二分音符 = 76、フィナーレ（アレグロ・アツサイ）は二分音符 = 152 になっている。このテンポ表示の中でメヌエットのテンポは、現代の我々が知るメヌエットのテンポと違い非常に速いことに気がつく。トリオでテンポを遅くするという指示はない。1789年から1793年の間にエステルハーゼで製作された機械仕掛けのオルガンにはハイドン作曲の二つのメヌエットが残されていて、これらのテンポもやはり速い（付点二分音符 = 63 と 76）ことから、当時の演奏習慣として、メヌエットのテンポは速く、フンメルのテンポ指定は、モーツァルトの意図を反映したものと思われる。

2017年7月10日 武本 浩

【参考文献】

1. Fitz Kneusslin: Karl Friedrich Abel – W. A. Mozart, Symphonie op. VII, No.6 Es-Dur, Edition Kneusslin Basel (1976).
 2. Dietrich Berke und Ulrich Leisinger: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 28: Bearbeitungen, Ergänzungen und Übertragungen Fremder Werke, Abteilung 3-5: Sonstige Bearbeitungen, Ergänzungen, Übertragungen, Band 3: Übertragungen von Werken verschiedener Komponisten, Bärenreiter Verlag (2009).
 3. Günter Hausswald: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 12: Kassationen, Serenaden und Divertiment für Orchester, Band 2, Bärenreiter Verlag (1961).
 4. Franz Giegling: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie V: Konzerte, Werkgruppe 14: Konzerte für ein oder mehrere Streich-, Blas- und Zupfinstrumente und Orchester, Band 4, Klarinettenkonzert, Bärenreiter Verlag (1977).
 5. Alan Hacker, Klarinettenkonzert in A-Dur, K.662, Ernst Eulenburg (1971).
 6. Henrik Wiese, Klarinettenkonzert A-dur, KV622, G.Henle Verlag (2003).
 7. Christopher Hogwood, Konzert in G für Flöte und Orchester nach dem Klarinettenkonzert K.622, Bärenreiter (2002).
 8. Christopher Hogwood, Konzert in A für Viola und Orchester nach dem Klarinettenkonzert K.622, Bärenreiter (1999).
 9. H. C. Robbins Landon: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 11: Sinfonien, Band 9, Bärenreiter Verlag (1958).
-

-
10. Otto Biba: Wolfgang Amadeus Mozart, Sinfonie g-moll, KV 550, Autographe Partitur, Erste und Zweite Fassung, Faksimile-Ausgabe, Gesellschaft der Musikfreunde in Wien (2009).
 11. Cliff Eisen: Another look at the 'corrupt passage' in Mozart's G minor symphony, K550. *Early Music*, 25(3): 373-382, (1997).
 12. Henrik Wiese: Wolfgang Amadeus Mozarat, Symphonie g-moll 1. und 2. Fassung KV 550, Breitkopf & Härtel (2014).
 13. Alan Tyson: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 33: Dokumentation der Autographen Überlieferung, Abteilung 2: Wasserzeichen-Katalog, Bärenreiter Verlag (1992).
 14. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts 8. Auflage, Breitkopf & Härtel (1983).
 15. Alan Tyson: Mozart, Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press (1987).
 16. Ulrich Konrad, Mozart Catalogue of his Works, Bärenreiter (2006).
 17. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989).
 18. H. C. Robbins Landon: Mozart, The golden years, Thames and Hudson (1989).
 19. グリエルモ・バルブラン 編著, 戸口幸策 訳: イタリアのモーツァルト, モーツァルト叢書12, 音楽之友社 (1978) .
 20. カール・フェルディナント・ポール 著, 海老沢敏・大久保一 共訳: ロンドンのモーツァルト, モーツァルト叢書13, 音楽之友社 (1979) .
 21. 高野紀子 訳・解説: 最初期のモーツァルト伝, モーツァルト叢書18, 音楽之友社 (1992) .
 22. オットー・エーヒ・ドイチュ, ヨーゼフ・ハインツ・アイブル 編, 井本响二 訳: ドキュメンタリー モーツァルトの生涯, シンフォニア (1989) .
 23. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集I, 白水社 (1976) .
 24. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集II, 白水社 (1980) .
 25. 海老沢敏, 高橋英郎: モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001) .
 26. アラン・タイソン (北村結花訳), 新年代推定法 – すかしと紙についての論考, モーツァルトの音と言葉, 岩波書店 (1991) .
 27. 三戸久史: 「ディヴェルティメント変ホ長調KV.113」&「モーツァルトとクラリネットの出会い」.
<http://www.geocities.jp/gdskj440/KV113-1.pdf>
 28. 三戸久史: 蘇ったバセット・クラリネット “シュータードラーとバセット・クラリネット” (大阪モーツァルトアンサンブル第42回定期演奏会プログラムノート) (2006).
<http://www.venus.dti.ne.jp/~kotani/OME/mito.pdf>
 29. Dennis Pajot, Fragment of Bassetthorn Concerto in G K584b/621b,
http://www.mozartforum.com/Lore/article.php?id=098&pt_sid=17fcfe7f8b591f0ee95e4b801d58ee0a
 30. 野口秀夫, 協奏曲楽章 K.584b(621b) バセットホルンとバセットクラリネット (2001),
<http://www.asahi-net.or.jp/~rb5h-ngc/j/k621b.htm>
 31. 西川尚生, ラノワ・コレクションのモーツァルト資料 (樋口隆一 編著 進化するモーツァルト) 春秋社 (2007) .
 32. 西川尚生, モーツァルト《ト短調交響曲》K.550の"Corrupt Passage"再考 (海老沢敏先生傘寿記念実行委員会編, 新 モーツァルティアーナ海老沢敏先生傘寿記念論文集) , 音楽之友社 (2011) .
-

大阪モーツァルトアンサンブル Osaka Mozart Ensemble

Intendant: 武本 浩

Konzertmeister: 大西 正人

Violinen: 濱田 利正 柿原 美夏 久保 聡一 佐藤 奈津子 清水 雅代

田邊 明子 筒泉 直樹 藤井 聡子 横小路 美貴子 塩沢 まり子

Bratschen: 能勢 徹 堀井 博子 里上 三保子 鈴木 菜の花

Violoncelli: 加納 隆 加納 千聡 橋爪 志周

Kontrabäße: 大川 宏明 横田 健司

Flöten: 阿部 葉子 亀田 紗里菜

Oboen: 小林 靖之 利谷 久美

富田 裕行 井上 麻紀

Klarinetten: 柳楽 由美子 向 朱理

Fagotte: 尾家 祥介 服部 真貴子

Hörner: 加藤 仁 北脇 知己



大阪モーツァルトアンサンブル第 66 回定期演奏会

日時：2018年1月20日（土）午後2時開演

会場：寝屋川市立地域交流センター アルカスホール

「ヘンデルとモーツァルト」

亀岡混声合唱団第 28 回定期演奏会

日時：2017年11月26日（日）午後2時開演（午後1時半開場）

会場：ガレリアかめおか響ホール

曲目：モーツァルト ミサプレヴィス KV220 (196b) 雀のミサ Spatzenmesse

四方 典子 (Sop) 児玉 祐子 (Alt) 納多 正明 (Ten) 油井 宏隆 (Bass)

指揮：板倉 計夫 合唱：亀岡混声合唱団 管弦楽：大阪モーツァルトアンサンブル

石澤整形外科 (医師：石澤 命仁)

診療科：整形外科、外科、リハビリテーション科、リウマチ科

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 (9時~12時)	○	○	○	○	○	○
午後 (5時~7時)	○	○	X	○	○	X

豊中市本町7-2-16

TEL: (06) 6852-3371

FAX: (06) 6852-3362

大阪モーツァルトアンサンブル 演奏記録

弦楽器のための協奏曲、管楽器のための協奏曲、交響曲

Werk			Tonart	KV Nr.	Datum	Ort	Solist(en)
Konzert	für Violine	Nr. 1	B-Dur	KV207	2005/6/25	Toyonaka	Tomoko Tagawa
Konzert	für Violine	Nr. 2	D-Dur	KV211	2006/9/24	Toyonaka	Tomoko Tagawa
Konzert	für Violine	Nr. 3	G-Dur	KV216	1987/9/26	Toyonaka	Junko Suzuki
Konzert	für Violine	Nr. 3	G-Dur	KV216	1993/11/17	Kyoto	Miwako Abe
Konzert	für Violine	Nr. 4	D-Dur	KV218	1986/9/7	Toyonaka	Koichi Hibi
Konzert	für Violine	Nr. 4	D-Dur	KV218	1994/6/30	Kyoto	Chika Yamashita
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	1989/10/19	Kyoto	Noriko Kohzai
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	1993/1/19	Kyoto	Hisako Hashimoto
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219	1995/1/14	Toyonaka	Hidemichi Kimura
Konzert	für Violine	Nr. 5	A-Dur	KV219/261	2014/6/7	Toyonaka	Takumi Nozawa
Rondo	für Violine		B-Dur	KV261a			
Rondo	für Violine		C-Dur	KV373			
Concertone	für zwei Violinen		C-Dur	KV186E	1988/3/27	Toyonaka	Masato Ohnishi Toshimasa Hamada
Concertone	für zwei Violinen		C-Dur	KV186E	2002/7/7	Ritto	Mariko Shiozawa Tomoko Yamane
Konzertante Sinfonie	für Violine und Viola		Es-Dur	KV320d	1989/7/15	Toyonaka	Yuki Mori (Vn) Tomoko Yamasaki (Va)
Konzert	für Flöte	Nr.1	G-Dur	KV285c	1993/1/19	Kyoto	Kazuyoshi Hashimoto
Konzert	für Flöte	Nr.1	G-Dur	KV285c	1993/3/27	Toyonaka	Kazuyoshi Hashimoto
Konzert	für Flöte	Nr.2	D-Dur	KV285d	1990/4/28	Toyonaka	Noriko Mizukoshi
Konzert	für Flöte	Nr.2	D-Dur	KV285d	1994/6/30	Kyoto	Kazuya Nishikawa
Andante	für Flöte		C-Dur	KV285e	1993/3/27	Toyonaka	Kazuyoshi Hashimoto
Konzert	für Flöte und Harfe		C-Dur	KV297c	1985/9/22	Toyonaka	Noriko Kurata (Fl) Chiaki Noda (Hf)
Konzert	für Flöte und Harfe		C-Dur	KV297c	2001/1/21	Otsu	Tomoko Ichikawa (Fl) Naori Uchida (Hf)
Konzert	für Oboe		D-Dur	KV285d	1991/2/10	Toyonaka	Kaeko Sumino
Konzert	für Oboe		D-Dur	KV285d	2007/4/29	Joyo	Benito Arellano Garcia
Konzert	für Klarinette	<Rekonstruierte Fassung für Bassettklarinette>	A-Dur	KV622	2006/5/28	Ritto	Hisashi Mito
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	1985/3/13	Toyonaka	Hisashi Mito
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	1986/6/13	Takarazuka	Alfred Prinz
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	1992/6/14	Toyonaka	Shin'ichiro Ohkawa
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	2002/3/10	Toyonaka	Yumiko Nagira
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	2010/10/31	Toyonaka	Kyoko Kato
Konzert	für Klarinette		A-Dur	KV622	2017/7/22	Toyonaka	Kuri Takeuchi
Konzert	für Fagott		B-Dur	KV186e	1992/4/29	Toyonaka	Shosuke Oka
Rondo	für Horn		Es-Dur	KV371	1988/5/14	Toyonaka	Ryo Koyama
Konzert	für Horn	Nr.1	D-Dur	KV386b	1988/5/14	Toyonaka	Ryo Koyama
Konzert	für Horn	Nr.1	D-Dur	KV386b	2015/6/27	Toyonaka	Chiemi Kosaka
Konzert	für Horn	Nr.2	Es-Dur	KV417	1988/5/14	Toyonaka	Ryo Koyama
Konzert	für Horn	Nr.2	Es-Dur	KV417	2015/6/27	Toyonaka	Chiemi Kosaka
Konzert	für Horn	Nr.3	Es-Dur	KV447	1988/5/14	Toyonaka	Ryo Koyama
Konzert	für Horn	Nr.4	Es-Dur	KV495	1984/9/2	Toyonaka	Masaaki Kawanishi
Konzert	für Horn	Nr.4	Es-Dur	KV495	1988/5/14	Toyonaka	Ryo Koyama
Konzertante Sinfonie	für zwei Flöten, zwei Oboen, und zwei Fagotte		G-Dur	KV320	1996/7/6	Toyonaka	Chieko Mori (Fl) Hiroyuki Ohmori (Fl) Masakatsu Inoue (Ob) Kumi Toshitani (Ob) Shosuke Oka (Fg) Makiko Hattori (Fg)
Konzertante Sinfonie	für Violine, Viola und Violoncello		A-Dur	KV 320e			
Konzertante Sinfonie	für Oboe, Klarinette, Horn und Fagott		Es-Dur	KV Anh. C14.01			

Werk	Tonart	KV Nr.	KV1 (1905)	KV3 (1937)	KV6 (1964)	Datum	Ort	
Sinfonie Nr. 1 <1. Fassung>	Es-Dur	KV 16	16	16	16	2003/3/9	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 1 <2. Fassung>	Es-Dur	KV 16	16	16	16	1989/3/18	Toyonaka	
Sinfonie	a-moll	KV 16a	Anh. 220	16a	16a	2004/11/27	Otsu	
Sinfonie Nr. 4	D-Dur	KV 19	19	19	19	1987/9/26	Toyonaka	
Sinfonie	F-Dur	KV 19a	Anh. 223	19a	19a	1995/4/9	Toyonaka	
Sinfonie	C-Dur	KV 19b	Anh. 222	19b	19b		<i>nur Incipit bekannt</i>	
Sinfonie Nr.5	B-Dur	KV 22	22	22	22	1995/9/30	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 32	32	32	32	1990/10/27	Kyoto	
Sinfonie	C-Dur	KV 35	35	35	35	1993/3/27	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 38	38	38	38	1995/4/9	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 43	F-Dur	KV 42a	76	42a	42a	1997/11/5	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 6	F-Dur	KV 43	43	43	43	1997/7/16	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 7 <1. Fassung>	D-Dur	KV 45	45	45	45	1990/4/28	Toyonaka	
Sinfonie <1. Fassung>	G-Dur	KV 45a	Anh. 221	45a	45a	1992/6/14	Toyonaka	
Sinfonie <2. Fassung>	G-Dur	KV 45a	Anh. 221	45a	45a	1992/4/29	Toyonaka	
Sinfonie Nr.55	B-Dur	KV 45b	Anh. 214	45b	45b	2004/6/6	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 7 <2. Fassung>	D-Dur	KV 46a	51	46a	46a	1988/5/14	Toyonaka	
Sinfonie	G-Dur	KV 46b	50	46b	46b	1991/2/10	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 8	D-Dur	KV 48	48	48	48	1996/3/23	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 62a	100	62a	62a	1997/11/5	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 66c	Anh. 215	66c	66c		<i>nur Incipit bekannt</i>	
Sinfonie	B-Dur	KV 66d	Anh. 217	66d	66d		<i>nur Incipit bekannt</i>	
Sinfonie	B-Dur	KV 66e	Anh. 218	66e	66e		<i>nur Incipit bekannt</i>	
Sinfonie Nr. 9	C-Dur	KV 73	73	75a	73	2003/12/14	Ritto	
Sinfonie Nr. 44	D-Dur	KV 73l	81	73l	73l	1991/7/6	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 47	D-Dur	KV 73m	97	73m	73m	1991/2/10	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 45	D-Dur	KV 73n	95	73n	73n	1998/12/20	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 11	D-Dur	KV 73q	84	73q	73q	1995/1/14	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 10	G-Dur	KV 74	74	74	74	1993/3/27	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 74a	87	74a	74a	1987/12/27	Toyonaka	
Sinfonie	d-moll	KV 74c	118	74c	74c	1993/9/27	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 42	F-Dur	KV 75	75	75	75	1992/10/18	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 12	G-Dur	KV 75b	110	75b	75b	1988/3/27	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 111+111a	111+120	111+111a	111+111a	1989/7/15	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 46	C-Dur	KV 111b	96	111b	111b	1988/12/24	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 13	F-Dur	KV 112	112	112	112	2004/6/6	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 14	A-Dur	KV 114	114	114	114	1989/7/15	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 15	G-Dur	KV 124	124	124	124	1998/4/29	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 16	C-Dur	KV 128	128	128	128	1992/6/14	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 17	G-Dur	KV 129	129	129	129	1984/9/2	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 18	F-Dur	KV 130	130	130	130	1988/9/25	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 19 <1. Fassung>	Es-Dur	KV 132	132	132	132	2003/3/9	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 19 <2. Fassung>	Es-Dur	KV 132	132	132	132	2002/7/7	Ritto	
Sinfonie Nr. 20	D-Dur	KV 133	133	133	133	1991/7/6	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 21	A-Dur	KV 134	134	134	134	1996/7/6	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 135	135	135	135	2001/8/19	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 50	D-Dur	KV 141a	161+163	141a	141a	1994/3/5	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 26	Es-Dur	KV 161a	184	166a	161a	1996/7/6	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 27	G-Dur	KV 161b	199	162a	161b	1990/7/7	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 22	C-Dur	KV 162	162	162	162	1996/7/6	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 23	D-Dur	KV 162b	181	162b	162b	1988/12/24	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 167a	185	167a	167a	2002/3/10	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 24	B-Dur	KV 173dA	182	166c	173dA	1988/5/14	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 25	g-moll	KV 173dB	183	183	173dB	1986/2/21	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 29	A-Dur	KV 186a	201	186a	186a	1986/9/7	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 30	D-Dur	KV 186b	202	186b	186b	1999/12/26	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 189b	203	189b	189b	2003/12/14	Ritto	
Sinfonie Nr. 28	C-Dur	KV 189k	200	173e	189k	1996/3/23	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 207a	121	207a	207a	1998/4/29	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 213a	204	213a	213a	2001/8/19	Toyonaka	
Sinfonie	C-Dur	KV 208+213c	208+102	208+213c	208+213c	1990/4/28	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 248b	250	248b	248b	1998/12/20	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 31 <1. Fassung>	D-Dur	KV 300a	297	300a	300a	1991/2/10	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 31 <2. Fassung>	D-Dur	KV 300a	297	300a	300a	1999/12/26	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 32	G-Dur	KV 318	318	318	318	1988/9/25	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 33 <1. Fassung>	B-Dur	KV 319	319	319	319	2012/10/6	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 33 <2. Fassung>	B-Dur	KV 319	319	319	319	1989/3/18	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 320	320	320	320	1997/11/5	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 34	C-Dur	KV 338	338	338	338	1992/10/18	Toyonaka	
Sinfonie	C-Dur	KV 384	384	384	384	1988/3/27	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 35 <1. Fassung>	D-Dur	KV 385	385	385	385	1994/3/5	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 35 <2. Fassung>	D-Dur	KV 385	385	385	385	1988/3/27	Toyonaka	
Sinfonie	D-Dur	KV 424a	430	424a	424a	1991/7/6	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 36	C-Dur	KV 425	425	425	425	1985/3/13	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 37	G-Dur	KV 425a+Anh. A53	444	425a	425a+Anh. A53	1990/7/7	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 38	D-Dur	KV 504	504	504	504	1985/9/22	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 39	Es-Dur	KV 543	543	543	543	1986/2/21	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 40 <1. Fassung>	g-moll	KV 550	550	550	550	2004/11/27	Otsu	
Sinfonie Nr. 40 <1. Fassung, Variant>	g-moll	KV 550	550	550	550	1993/9/27	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 40 <2. Fassung>	g-moll	KV 550	550	550	550	1987/12/22	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 40 <2. Fassung, Variant>	g-moll	KV 550	550	550	550	2017/7/22	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 41	C-Dur	KV 551	551	551	551	1989/3/18	Toyonaka	
Sinfonie Nr. 3	Es-Dur	KV Anh. A51	18	Anh. 109i	Anh. A51	C.F.Abel Op.7/6	1999/12/26	Toyonaka
Sinfonie	D-Dur	KV Anh. A52	291	Anh. 109xi	Anh. A52	M.Haydn P.43 [Sherman 287]		
Sinfonie	D-Dur	KV Anh. A59	-	388d	Anh. A59	J.Haydn Hob.I.75		
Sinfonie	G-Dur	KV Anh. A59	-	389d	Anh. A59	J.Haydn Hob.I.47	1987/9/26	Toyonaka
Sinfonie	D-Dur	KV Anh. A59	-	390d	Anh. A59	J.Haydn Hob.I.62		
Sinfonie	C-Dur	KV Anh. A59	-	391d	Anh. A59	?		
Sinfonie	C-Dur	KV Anh. C11.01	-	16b	Anh. C11.01	L.Mozart?		
Sinfonie Nr. 2	B-Dur	KV Anh. C11.02	17	Anh. 223a	Anh. C11.02	L.Mozart	2006/5/28	Ritto
Sinfonie Nr. 54	B-Dur	KV Anh. C11.03	Anh. 216	74g	Anh. C11.03	W.A.Mozart?	2005/6/25	Toyonaka
Sinfonie Nr. 48	F-Dur	KV Anh. C11.04	98	Anh. 223b	Anh. C11.04	?		
Sinfonie	B-Dur	KV Anh. C11.05	-	311a	Anh. C11.05	?		
Sinfonie	D-Dur	KV Anh. C11.06	Anh. 219	Anh. 291b	Anh. C11.06	L.Mozart		
Sinfonie	D-Dur	KV Anh. C11.07	-	Anh. 223	Anh. C11.07	<i>nur Incipit bekannt</i>		
Sinfonie	F-Dur	KV Anh. C11.08	-	Anh. 223	Anh. C11.08	<i>nur Incipit bekannt</i>		
Sinfonie	G-Dur	KV Anh. C11.09	Anh. 293	Anh. 293	Anh. C11.09	L.Mozart		
Sinfonie	F-Dur	KV Anh. C11.10	-	Anh. 293c	Anh. C11.10	I.Pleyel		
Sinfonie	C-Dur	KV Anh. C11.11	-	-	Anh. C11.11	A.Gyrowetz		
Sinfonie	F-Dur	KV Anh. C11.12	-	-	Anh. C11.12	K.Dittersdorf		
Sinfonie	G-Dur	KV Anh. C11.13	Anh. 294	Anh. 294	Anh. C11.13	L.Mozart	1998/12/20	Toyonaka
Sinfonie	C-Dur	KV Anh. C11.14	-	-	Anh. C11.14	F.J.Eberl		
Sinfonie	C-Dur	KV Anh. C11.15	-	-	Anh. C11.15	?		
Sinfonie	G-Dur	KV Anh. C11.16	-	Anh. 109g	Anh. C11.16	?		